

題材と資質・能力

中・高学年児童対象
立体 / 造形遊び

1. コンテンツ から コンピテンシー へ

図画工作科の学習活動は、教科目標に「表現及び鑑賞の活動を通して」とあるように、つくったりかいたりする活動や実際に見たり触れたりして味わう活動、つまり具体的な活動が手段となっています。このことから図画工作科の授業づくりでは「具体性」が意識されるために自然に『どんな活動か？（＝どんなコンテンツか？）』に注意が向くようになります。これはもちろん図画工作科の特性と言えるでしょう。しかしながら、そうした傾向が逆に、今言われているような『育てたい資質・能力（＝コンピテンシー）から授業を考えよう！』という考えを阻害することも多々あります。

2. コワい事例

例えばこのことを端的に示す事例として、“教材キット”があります。各教材会社の教材カタログには、教科書題材に準拠した教材キットが掲載されています。例えば、中学年の典型的な題材“ビー玉ゲーム”も各社のカタログに掲載されています。

ここで架空のお話し。みなさん考えてみてください。

A社のカタログでは、材料となる色画用紙、工作用紙がセットになっていて、280円（税抜）であるのに対して、B社のカタログには、上記のセット内容はもちろん、こんな宣伝文句が添えられています。

“大きな4段のめいろが作れます。台紙はすべて加工済みで、ラクラク仮組み！接着剤を使わなくても組み立てることができます。”

しかもこれでお値段据え置きで280円！みなさんは、どちらのセットを選びますでしょうか？

賢明な消費者でもある先生方であれば、迷いなくB社で即決でしょう！・・・しかしここで考えなければいけないことがあります。B社が宣伝する《4段のめいろ》、《台紙はすべて加工済み》、《接着剤を使わなくても》という触れ込みは、実は題材への“越権行為”とも言えるものです。どういふことかと言うと、「4段つくるのがよい」、「台紙を加工することはできない」、「接着剤は使わなくてもよい」という条件が設定されていることで、子供が発揮できる（子供に育つ）資質・能力が自動的に設定されているのです。このことを自覚しているならばまだしも（もちろん、それも問題ですが）、無自覚に、便利だから、という理由だけで安易に飛びつくことは、題材という具体（コンテンツ）が目的化されてしまっており、学習者である子供に育てたい資質・能力（コンピテンシー）は、コンテンツに不随するものとして脇に追いやられてしまっていることを意味するのです。本来は、育てたい資質・能力が「目的」であり、題材はそのための「手段」として用意されるべきはずなのに、それが主客転倒してしまっているのです。



※画像は、本文内容と関係ありません。

3. ワークショップを通して考えてみたいこと

・・・というわけで、本ワークショップでは、図画工作科の題材にまつわる「コンテンツ」（材料や用具、題材そのものも含まれます）と、育てたい資質・能力、すなわち「コンピテンシー」との関係について考えてみたいと思います。具体的には、以下2つについて考えてみたいと思います。

- ▶ よい授業には、「ねらい（育てたい資質・能力）」と「題材、材料・用具（環境）」との間に必然的な関係がある。
- ▶ 同じ「粘土」という材料でも、発揮される資質・能力には違いがあることを、2つの実技を通して実感的に理解する。

4. 「粘土を材料に」と言っても…： 題材比較ワークショップから

題材名	『立ち上がれ！ねんど』	『わたしのグアナコ』
材料・用具	・土粘土 ・切糸 ・のぼし棒 ・霧吹き ・ヘラ ・粘土板 ・ビニル袋 ・保存容器 ・雑巾 ・バケツ	・土粘土 ・霧吹き ・ヘラ ・粘土板 ・ビニル袋 ・保存容器 ・雑巾 ・バケツ
主な活動	① 粘土の体操 ② のぼす ③ 切る ④ 組み合わせる ⑤ つなげる？ ⑥ 相互鑑賞	① 粘土の体操 ② グアナコって？ ③ 切る、のぼす、まるめる、 組み合わせる… ④ 相互鑑賞
育てたい 資質・能力	?	?
領域・分野	表現・()	表現・()

5. (時間があったら)「絵に表す」と言っても…

上のワークショップでは、どちらも粘土を材料として扱った題材であっても、それぞれに発揮される（育てたい）資質・能力は異なることを確認できます。ですので、いえ、だからこそ、それぞれの分野は「造形遊び」であり「立体」なのですね。『そりゃそうだよ』という声も聞こえてきそうですね。さらに考えてみるならば、「絵（に表す）」分野の題材と言っても、題材ごとに発揮される（育てたい）資質・能力は、やはり異なります。

時間があれば・・・ですが、「絵に表す」題材でも比較ワークショップを行ってみましょう。

6. 資質・能力から授業を考えること = 子供のことを想うこと

本ワークショップを通して、現在巷で盛んに言われている『育てたい資質・能力（コンピテンシー）から授業を考えよう！』というフレーズが図画工作科の授業にも大いに当てはまることをご理解いただければと思っています。そしてそのことを実践することとは、子供のことを想って授業をつくることなのではないか、そんな風に思っています。





